

ウェルビーイングのための考古学

サイモン・ケイナー、アンディ・ハッチンソン

要旨

私たちは、長期的な視点やランドスケープ(景観)の変化に関心を持つ考古学者として、人は社会的・物質的なネットワークを通じて体現された形で景観を作り、経験するという見解を持つに至った (Tilley 1994; Tilley and Cameron-Daum 2017; Strathern 1999; Fowler 2004; Merleau-Ponty 1945[2012])。景観が過去どのように経験され、人間性がいかに構成されたかに関する疑問は、現在も続く関心事である。こういった考えが行き着くのは、健康とウェルビーイングを構成するものについて、そして遺産や景観、場所、イデオロギーなどが現代人の心の状態にどのように貢献するかについての思考である。

2021 年 7 月下旬、先史時代ノーフォークの 2 つの遺跡であるアーミングホール・ヘンジとウォーラム・キャンプ・ヒルフォートを訪れ、考古学者や学校教師、ボランティア候補者を集めたワークショップを開催し、「後期先史時代のノーフォーク・プロジェクト」への取り組みを始めた。どちらの遺跡もよく知られてはいたが、いまだ研究上の重要な疑問を残していた。これらの遺跡が健康とウェルビーイングに焦点を当てたコミュニティ考古学プロジェクトにとって魅力的な場所であると感じられたことから、私たちは時間を費やして一連の資金調達提案書を作成することを決断した。

次に、慈善団体のレストレーション・トラストを巻き込んだ。メンタルヘルスの問題を抱えた人々に対して遺産がもたらす恩恵に目を向けた活動を行う団体であり、ヒューマン・ヘンジやバーク城アルマナックなどのプロジェクト活動を通して私たちもよく知っている。この 2 つのプロジェクトは、歴史的景観の創造的な探求に焦点を当てたものだ。

「後期先史時代のノーフォーク・プロジェクト」の主な目的は、過去のプロジェクトの成果をさらに発展させることと、考古学フィールドワークや調査への参加から得られるウェルビーイングにおける潜在的な恩恵を探ることである。後者の分野での先駆的な活動は、ナイチンゲール作戦を通じてイギリス国防省によって既に行われている (Winterton 2014; Everill et al. 2020)。この活動では、2018 年期のフィールドワークに参加した退役軍人のウェルビーイングの改善が示され、鬱や不安、孤立感の軽減に加え、自分が大切にされているという感情が高まったことが証明されている (Everill et al. 2020)。ここで、何がこのような改善をもたらしたのか? という具体性への疑問が残る。組織化された社会環境の中で居場所を見つけることだろうか? 屋外の活動だということか? それとも、この活動の本質と、それが引き出すマインドフルネスによるものだろうか? ナイチンゲール作戦の活動を根拠として、特に退役軍人に対する治療としての考古学の活用に世界的な関心が高まっている (Everill et al. 2020:213)。

コミュニティ考古学は、潜在的に多様な背景を持つ人々が、過去と現在との関係にまつわるナラティブを探求し、生み出すための共同作業になりうる。最近のこの分野での研究から読み取れるのは、遺産には、特に古代の景観との関わりを通して、ウェルビーイングの維持・改善方法として大きな潜在力があり、それゆえ考古学の実践が人々のメンタルヘルスに変化をもたらす可能性があるということである。英国におけるメンタルヘルスは危機的状況にあり、主流の医療行為と並行して、人々を景観や遺産に結びつけるプログラムを作る必要がある。Everill (2022) は、考古学フィールドワークを行う際のプロセスや採用されている方

法論体系が多くの人にとって好ましいものであり、おそらくそれら自体が癒す力を持っていると指摘している。また、下垂体疾患である先端巨大症を患っていたこの分野の先駆者であるウィリアム・カニントン自身が、自らが開発し、後に考古学の標準的な実践手法となった方法論に安らぎを見出していた可能性にも触れている。

サイモン・ケイナー、そして後にサム・ニクソンが率いた過去の2つのプロジェクトも「後期先史時代のノーフォーク・プロジェクト」の方向性を決定する上で大きな影響を与えた。1つ目は、セトフォードのグライムス・グレイブスにある新石器時代のフリント鉱山と長和町星糞にある縄文時代の黒曜石鉱山を結びつけるプログラムである。セトフォードのエインシャント・ハウス・ミュージアムやイングリッシュ・ヘリテッジ、星糞博物館が参加したこのプロジェクトは、セトフォードの高校生による日本への、そして長和町の高校生によるセトフォードへの訪問の後押しとなった。一部の生徒にとって、このように視野を広げることの影響は大きかった。セトフォードはノーフォーク州の比較的恵まれない中規模の町で、歴史的環境は素晴らしいが、教育の成果は低い。そんな生徒の何人かが大学で考古学を学ぶことになった。もう1つのプロジェクトは、イースト・アングリア地方にある複数の重要な考古学遺跡に対する国際的視点の提供と世界各地の遺跡との比較を目的とした「グローバルな視点から見た英国考古学」である。

2022年本プロジェクトは、ブリッジのすぐ南に位置するアーミングホール・ティンバーサークル(環状木柱列)と環状遺跡の再調査に着手した。主要テーマのひとつに沿った形で、アーミングホール・ヘンジは、1929年6月18日空軍中佐ギルバート・インサル VC によって航空写真から発見され、これが先史時代の遺跡である可能性が高いという認識から、「ノーフォークのウッドヘンジ」と名付けられている (Crawford 1929)。1935年には、ケンブリッジ大学人類学・考古学学科に助講師として採用されたばかりのグレイアム・クラークの指揮による環状遺跡とその中心にある環状木柱列の発掘調査が行われた。建設が予定されていた電力インフラによる遺跡への侵害を懸念したノーフォーク調査委員会からの発掘指揮の依頼であったが、この調査では大規模な電気塔が内部と外部の溝の間に建設されることを防ぐことはできなかった。つまり、クラークの1935年の発掘調査には、初期のレスキュー考古学というテーマがあった。

こうしてクラークの発掘調査は、私たちの持っていた疑問の基礎を築き、私たちの活動に歴史的背景を与えた。私たちのグループが得るだろう経験の方向性を示し、私たちにナラティブを与えてくれたのである。これが私たちにとっての初めて試みる考古学調査であったこと、そしてパートナーシップも全く新しいものであったことから、このことは有意義であった。クラークのナラティブが既に存在していたことは、この活動を説明し、このテーマの発展における位置づけを理解する上で大きな助けとなったのである。この過去の考古学研究者のコミュニティとのつながりは、フィールドワークに新たな局面をもたらした。それは、遺跡の再発掘中でさえ、過去に存在した遺跡を視覚化し、想像する助けとなったからである。参加者のうち数名が現地で美術作品の制作に取り組んだが、このような刺激は、彼ら自身の芸術的プロセスにとっても有益であった。

考古学者マイケル・シャンクスは、「考古学的想像力」と名付けた概念を探求し、このテーマに関する最も実りある探求の中には現代美術から見出せるものがあると示唆している (Shanks 2012)。芸術や現代美術は、過去の側面を現在に関連付ける方法であり、考古学の方法論の実践とその実践のための科学的根拠を補完する。芸術と考古学の関係は以前から指摘されており、20世紀における考古学の方法論を革新した偉大な人物のひとりであるフィリップ・バーカーが、考古学に転向する前に学校で美術を教えていたことは興味深い (Everill 2022)。「共創」という可能性が開かれるのは、特に芸術の領域とマインドフルネスに通じる方法論的实践においてだろう。これが、多角的な視点や見方のための空間を生み出す。Pearson and Shanks (2001) は、演劇やパフォーマンスとしての考古学という考え方をさらに探求しているが、「共創」の場があるのはそこなのだろうか？この「共創」の機会がエンパワーメントをももたらし、そしておそらくは

それを通じてウェルビーイングにつながっていることを期待したい。これが私たちのアーミングホールにおける経験であり、環状木柱列と環状遺跡や周辺調査に関する素晴らしいドローイングや絵画、写真、詩、散文、議論が生みだされた。当時からこういったことすべてが明らかだっただけではなく、フィールドワークが終わって初めてわかったことであり、私たちは次の展開についての議論を始めた。レストレーション・トラストでは、これまでのプロジェクトの一部が文書化されており、バーク城アルマナックでもプロジェクト中に制作された文章や芸術を紹介する書籍が作成されている。それを製作した同僚のロブ・フェアクロウがアーミングホールのために同様のものを作ろうと申し出てくれた (Fairclough 2021)。

本稿執筆時点ではまだ評価は完了していないが、プロジェクト・スタッフの解釈を押し付けるのではなく、参加者の経験に対する認識に焦点を当て続ける必要があることを念頭に置いて進めている (Baxter and Burnell 2022:17)。この潜在的な落とし穴を防ぐため、このプロジェクトではイースト・アングリア大学医学部の精神分析医を起用し、収集したデータを量・質的に客観的に評価してもらっている。また、ウェルビーイング自体や想定されているメンタルヘルスとの結びつきに関する文献の多くには文化的な特異性がある点を意識することも重要である (Baxter and Burnell 2022:16)。本プロジェクトの目的のひとつは、景観の中にいることで参加者にもたらされる可能性がある潜在的な効果と継続性を検証することである。今後の研究では、フィールドワーク中に行った具体的な活動の種類ごとにグループを分けて検討することも有効かもしれない。また、考古学プロジェクトに参加したり、歴史的な場所や景観の中で過ごしたりすることがなぜウェルビーイングという考え方における感情的・知的基盤を提供するのかについても、私たちは遺産の専門家として、より理論的な研究を行う必要がある。

コミュニティ遺産プロジェクトの効果をさらに検証するための後続の研究として、実験的にコミュニティ用の試掘坑を開けた発掘を始めている。この研究では、試掘坑を開けることに関与しなかった対照群も調べている。その結果、試掘坑群では、コミュニティ支援に対する認識が高まったことに加え、より高い自己効力感や生活満足度、肯定的感情が認められたが、対照群においては認められなかった (Brizi et al.2023)。ブラインドテストで対照群と比べるこのアプローチと並行して、景観や歴史的な場所、考古学の方法論がもたらす潜在的な恩恵に対して人が反応する範囲の概念化もさらに進める必要がある。

方法論に沿いながらも創造的に考古学的要素や周囲の景観とのつながりを調査するための条件を整えることは、プロジェクトを成功させるための基本である。これを達成することと、資金やロジスティクスの手配の両立は難しい。実践者として重要なことは、困難や断絶に目をつぶらないことである。発見とは、マイケル・シャンクスが指摘する「考古学的想像力」の実践であり、また最近 Paul Everill (2022) によって指摘された考古学に携わるという実際のプロセスが持つ魅力でもあり、この活動の重要なやりがいのひとつである。これはコミュニティとして実践し、多くの異なる人々や視点が関与することによって恩恵を受けるものなのである。

ストーンヘンジにおける縄文文化の紹介

セインズベリー日本藝術研究所の考古学・文化遺産センターが熱望していることのひとつに、日本の考古学を知らない海外の人々に日本の考古学を紹介することがある。この目的のために、私たちは、様々なメディアを使って日本の考古学を紹介しており、比較というアプローチを用いることがある。

最近では、イングリッシュ・ヘリテッジや新潟県立歴史博物館、ユネスコ世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」と連携し、数年にわたる準備期間を経て、2012年にオープンしたストーンヘンジ・ビジターセンターにおいて特別展を開催した。この「環状列石：ストーンヘンジと日本先史時

代」展は 2022 年 9 月から 1 年間にわたって開催され、ユーラシア大陸の東西端の環状列石をテーマにした会議と和太鼓奏者によるパフォーマンスで幕を閉じた。この展示は石橋財団の後援によるものである。

この特別展では、約 5000 年前を中心としたストーンヘンジ造営時代の日本、木版画家・漆原吉次郎の作品に描かれるストーンヘンジ、ストーンヘンジ研究史における、特にウリアム・ゴーランドの研究を通じた日本とのつながり、そして日本の環状列石という 4 つのテーマに基づいて、日本と英国から借用された約 70 点が展示された。ウリアム・ゴーランドに関する資料は、大英博物館とロンドン古物協会からの借用である。

イングリッシュ・ヘリテッジにとってこの特別展は、日本の考古学との関わりを得る前例のない機会となった。関連イベントとして、縄文土器の製作ワークショップや長野県から来た日本人学生による黒曜石細工の展示、日英の専門家による二国間訪問、ロンドンの在英国日本国大使館での講演会などが行われた。このプロジェクトは、ストーンヘンジと同じ世界遺産を構成し、最大の環状列石として知られるエーヴベリーでの小規模であるが長期間にわたる展示にもつながった。この特別展準備の最終段階にあたる時期には、大英博物館において数十年ぶりに先史時代に関する大規模展示「ストーンヘンジの世界」が開催され、先史時代の考古学全般に対する関心をおおいに高めた。

当初イングリッシュ・ヘリテッジは、それまで英国環境省が直接担っていた歴史的環境の管轄を行う英国政府機関として 1983 年に設立された。それが 2016 年の大規模な組織改編により、国にとって重要な 400 以上の歴史的建造物を管理する責任を持つ独立した慈善団体となった。古代の重要遺物を保存建造物目録に加える（あるいはその指定を行う）などの考古学と歴史的環境について政府に助言する役割は、新たな組織であるヒストリック・イングランドに与えられた。イングリッシュ・ヘリテッジは、英国政府から 8 年間にわたる大規模な助成金を受けて新たに設立されたが、その後（つまり、今年 2024 年）からは、ストーンヘンジなどの歴史的建造物への入場料や、会員その他の資金源からの資金調達によって自立しなければならない。

景観の中にあるストーンヘンジと関連する記念建造物群を調査する一連の大型研究プロジェクトによって、近年この最も有名な遺跡に対する我々の理解は大きく変わった。特にロンドン大学のマイク・パーカー・ピアソンと英国を代表する先史学者チームが率いたストーンヘンジ・リバーサイド・プロジェクトでは、ストーンヘンジにおける新たな発掘と過去に行われた調査の大幅な再評価、ストーンヘンジの景観における近隣エイヴオン川が持つ重要性の認識、ダーリントン・ウォールズにおける新石器時代の大規模集落の発掘、そしてこれまで知られていなかった環状列石ブルーストーンヘンジの特定などが行われた。これらの発見については、最近出版された一連の私の著作で紹介している。

本特別展では、特に秋田県の大湯と伊勢堂岱にある縄文時代の環状列石に関する研究が紹介され、ブリテン諸島と日本列島の環状列石の比較について考察する機会が提供された。この比較には、このような重要遺物が葬送儀礼に使用されていたこと、特に冬至や夏至に関連する環状列石の古天文学的意義、これらの遺跡に関係する職業の歴史や現在では数多くの高分解能放射性炭素年代測定によって裏付けられている発展過程、環状列石とその周辺の景観との関係、環状列石の造営に使用された石の岩石学的分析とその産地、そして環状列石に関連する物質文化とそれが先史時代の社会的相互作用について何を物語っているか、などが含まれている。

これらの遺跡における純粋な考古学的興味に加え、この展示プロジェクトは、文化遺産としての

環状列石の意義と現代世界におけるその役割について考えるきっかけにもなった。ストーンヘンジには世界中から毎年 150 万人以上の観光客が訪れ、無料で入場が許可されている春分・秋分の日や夏至・冬至などの機会には、今でも神聖な場所として多くの人々が訪れる。北海道・北東北の縄文遺跡群がユネスコ世界遺産に登録されたことで、縄文時代の環状列石を訪れる観光客はさらに増加し、インタラクティブなデジタル表示画面や日本語以外の言語による情報提供などが整備され、観光施設も充実した。観光客の増加は、経済的利益をもたらすだけでなく、環状列石などの脆弱な遺跡の保護・保全にも影響を及ぼす。現在、世界遺産ストーンヘンジの敷地内に道路トンネルを建設する計画が世間を賑わせているが、遺跡の真下に道路トンネルを建設して環状列石を保存した北海道の鷲ノ木の状況に大きな関心が集まっている。

他の優れた国際研究プロジェクトと同様、この「環状列石」展が新たな研究ネットワークを育み、この展示や関連した研究が日英考古学のさらなる協力のための礎となることを願っている。

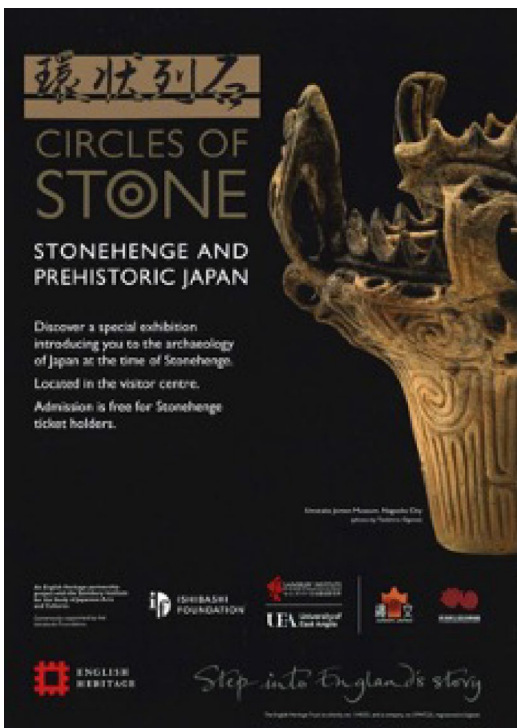


図1 Poster for Circles of Stone Exhibition at Stonehenge

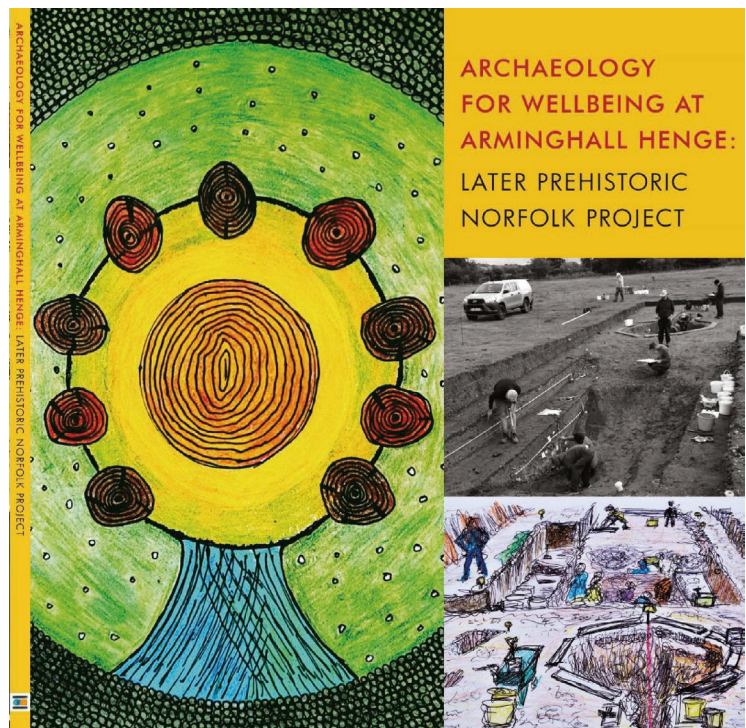


図3 ○○



図2 Big Rock and Little Pot yurukyara developed for Circles of Stone exhibition

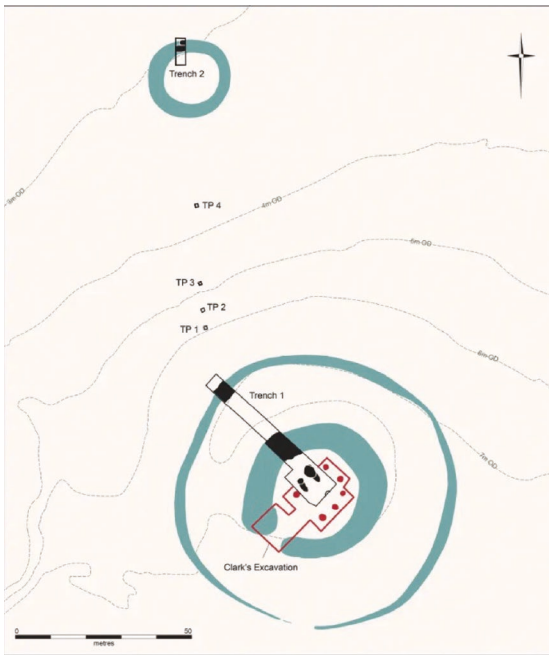


图 4 Plan of Arminghall Henge

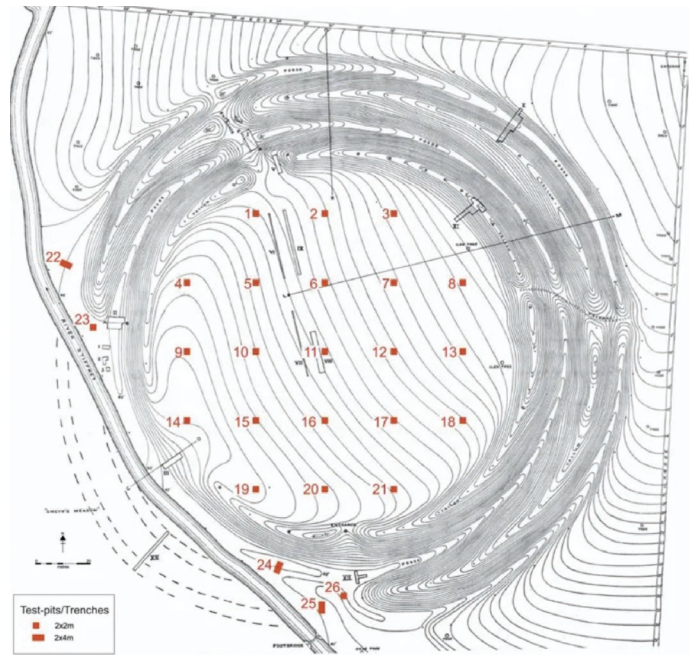


图 5 Plan of Warham Camp

参考文献

- Baxter, L. and K. Burnell 2022. What is wellbeing and how do we measure and evaluate it?, in P. Everill and K. Burnell (eds) *Archaeology, Heritage, and Wellbeing: Authentic, Powerful, and Therapeutic Engagement with the Past: 7-25*. Milton, UK: Taylor & Francis Group.
- Brizi, A., A. Rabinovich and C. Lewis 2023. Psychological outcomes of local heritage engagement: Participation in community archaeological excavations increases well-being, self-efficacy, and perceived community support. *Journal of Applied Social Psychology*: 1-12, viewed 24 July 2023, <<https://doi.org/10.1111/jasp.12972>>.
- Crawford, O. G. S. 1929. Editorial notes. *Antiquity* 3: 257-260.
- Everill, P. 2022. Introduction to archaeology: a personal perspective, in P. Everill and K. Burnell (eds) *Archaeology, Heritage, and Wellbeing: Authentic, Powerful, and Therapeutic Engagement with the Past*. Milton, UK: Taylor & Francis Group.
- Everill, P., R. Bennett and K. Burnell 2020. Dig in: an evaluation of the role of archaeological fieldwork for the improved wellbeing of military veterans. *Antiquity* 94(373): 212-227.
- Everill, P. and K. Burnell 2022. *Archaeology, Heritage, and Wellbeing: Authentic, Powerful, and Therapeutic Engagement with the Past*. Milton: Taylor & Francis Group.
- Fairclough R. and A. Hutcheson 2022. *Archaeology for wellbeing at Arminghall Henge: Later Prehistoric Norfolk Project*. Norwich: The Restoration Trust.
- Faulkner, N. 2009. The Sedgeford Crisis. *Public Archaeology* 8(1): 51-61.
- Fowler, C. 2004. *The Archaeology of Personhood: An Anthropological Approach*. London: Routledge.
- Merleau-Ponty, M. 1945 [2012]. *Phenomenology of Perception*. Abingdon: Taylor & Francis Group.
- Pearson, M. and M. Shanks 2001. *Theatre/archaeology*. London: Psychology Press.
- Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, 2023, Globalising British Archaeology Through a Japanese Lens, viewed 21 July 2023, <<https://www.sainsbury-institute.org/project/globalising-british-archaeology-through-a-japanese-lens/>>.
- Shanks, M. 2012. *The Archaeological Imagination*. Walnut Creek: Left Coast Press.

- Strathern, M. 1999. *Property, Substance, and Effect: Anthropological Essays on Persons and Things*. London: Athlone Press.
- Tilley, C. 1994. *A Phenomenology of Landscape: Places, Paths, and Monuments*. Oxford: Berg.
- Tilley, C. and K. Cameron-Daum 2017. *An Anthropology of Landscape: The Extraordinary in the Ordinary*. London: UCL Press.
- Winterton, S. 2014. From the Army Medical Centre to Operation Nightingale: My entry into archaeology. *Journal of Community Archaeology & Heritage* 1(3): 245-247.

Archaeology for Well-being

Simon Kaner and Andy Hutcheson

Abstract

As archaeologists with an interest in the *longue durée* and in landscape change we have come to the view that people shape and experience landscapes in an embodied way through social and material networks (Tilley 1994; Tilley and Cameron-Daum 2017; Strathern 1999; Fowler 2004; Merleau-Ponty 1945 [2012]). Questions around how landscapes were experienced in the past and how personhood was constituted are on-going interests. These ideas flow into thinking about what constitutes health and well-being, and how heritage, landscape, places, and ideology contribute to contemporary mind-states.

We began developing the Later Norfolk Prehistoric in late July 2021 when a workshop was held with archaeologists, schoolteachers, and potential volunteers, visiting two prehistoric Norfolk sites: Arminghall Henge and Warham Camp Hillfort. Although both these sites are well-known, key research questions remain to be asked. Both were felt to be compelling places for a community archaeology project with a focus on health and well-being. We made the decision to devote the time to developing a set of funding proposals.

We next involved the Restoration Trust, a charity focused on the benefits of heritage for people suffering from poor mental health who we knew from their work on the Human Henge and the Burgh Castle Almanac projects. These projects focused on the creative exploration of a historic landscape.

A central aim of the Later Prehistoric Norfolk Project is to extend the work of previous projects and explore the potential benefits of taking part in archaeological fieldwork and research for well-being. Pioneering work in this area has been done by the UK Ministry of Defence through the work of Operation Nightingale (Winterton 2014; Everill *et al.* 2020). That work showed improvements in well-being amongst military veterans participating in the 2018 fieldwork season, demonstrating a reduction in depression, anxiety, and perceptions of isolation, with increased feelings of being valued (Everill *et al.* 2020). Questions of specificity remain; what is causing these improvements? Is it finding a place in a structured social setting? Is it being outdoors? Or is it the nature of the work and perhaps a mindfulness that it elicits? Based on the work of Operation Nightingale, there is now a global interest in the therapeutic use of archaeology, particularly for veterans (Everill *et al.* 2020: 213).

Community archaeology can be a collaborative way for people from potentially diverse backgrounds, to

explore and produce narratives related to the past and its relationship to the present. What can be gleaned from recent research in this area is a strong potential for heritage as a way of maintaining and improving well-being, particularly through engagement with ancient landscapes, and that the practice of archaeology can make a difference to people's mental health. We are in a mental health crisis in the UK and there is a need to create programmes connecting people to landscapes and heritage, alongside mainstream medical practice. Everill (2022) points out that for many, the process of undertaking archaeological fieldwork and the methodological systems employed are appealing and perhaps in themselves can be therapeutic; further noting that William Cunnington, a pioneer of the subject, suffered from a pituitary gland disorder, acromegaly, and may have found relief in the methodologies he developed which later become the commonplace practices of archaeology.

Two previous projects led by Simon Kaner and latterly Sam Nixon, were also influential in determining the course of the Later Prehistoric Norfolk Project. The first was a programme twinning of the Neolithic flint mine of Grimes Graves, Thetford, with the Jōmon period obsidian mine of Hoshikuso, Nagawa-machi. Thetford Ancient House Museum, English Heritage and the Hoshikuso Museum participated in the project which facilitated high school students from Thetford going to Japan, and students from Nagawa-machi coming to Thetford. The effect of this broadening of horizons on some of the students was significant. Thetford is a relatively deprived medium sized town in Norfolk, with a wonderful historic environment but poor educational outcomes. Several of the students went on to study archaeology at university level. The other project was Global Perspectives on British Archaeology, which aimed to provide an international view on some of East Anglia's most significant archaeological sites and compare them to sites in other parts of the world.

The project broke ground in 2022 with the reinvestigation of Arminghall timber circle and henge located just to the south of the Norwich. In keeping with one of the main themes, Arminghall Henge was discovered by aerial photography on 18th June 1929 by Wing Commander Gilbert Insall VC, who recognised it as a likely prehistoric monument and dubbed it 'Norfolk's Woodhenge' (Crawford 1929). In 1935 Grahame Clark, who had recently been employed as an assistant lecturer by Cambridge University's Department of Anthropology and Archaeology, led an excavation of both the henge and the timber-circle at its centre. Clark was asked to direct the excavations by the Norfolk Research Committee, who were concerned about the encroachment of electricity infrastructure on the monument, which had been scheduled; this did not prevent the building of a large electricity pylon between its inner and outer ditches. There was therefore an early rescue archaeology theme to Clark's 1935 excavation.

Clark's work thus formed the basis for the questions we wanted to ask and provided a historical context for our work. It set the tone for the experience that our group was to have and gave us a narrative. This was useful as it was the first time we had attempted an archaeological investigation and all the partnerships were new. Having Clark's pre-existing narrative helped enormously in explaining the work and in understanding its place in the development of the subject. This connection with a past community of archaeological researchers was an added dimension to the fieldwork. It helped us visualise and imagine the monument during the past, even as we were uncovering it again. Several participants undertook artwork on site, and it was useful for their own artistic process to have these prompts.

The archaeologist Michael Shanks has explored a notion that he has termed 'the archaeological imagination', suggesting that some of the most fruitful explorations of the subject can be found in contemporary art (Shanks 2012). Fine art and contemporary art are ways of relating aspects of the past to the

present, complementing practices of archaeological methodology and the scientific basis for them. The relationship between fine art and archaeology has been noted before and it is interesting that one of the great 20th century methodological innovators in archaeology, Philip Barker, taught art in school before switching to archaeology (Everill 2022). It is perhaps particularly in the realms of fine art and its mindful and methodological practices, that the possibility of ‘co-creation’ opens. This creates the space for multiple perspectives and views. Pearson and Shanks (2001) have further explored the idea of archaeology as theatre or performance; perhaps this is where the locus of ‘co-creation’ might be found? Hopefully, this ‘co-creative’ opportunity also provides empowerment and perhaps through that, can lead to feelings of well-being. This was our experience at Arminghall, where a remarkable set of drawings, paintings, photographs, poems, prose, and discussions were produced in and around the investigations of the timber circle and the henge. Not all of this was obvious at the time, but only came to light after the fieldwork was finished and we began to talk about what could happen next. The Restoration Trust had documented a few of their previous projects, including the Burgh Castle Almanac, producing a book showcasing the writing and art produced during the project. Our colleague Rob Fairclough produced that volume and did the same for Arminghall (Fairclough 2021).

The evaluation is not yet complete at the time of writing, and we are mindful of the need to remain focused on participant perceptions of their experience, rather than imposing project staff interpretations (Baxter and Burnell 2022: 17). To guard against this potential pitfall, the project has employed an analyst from Norwich Medical School to objectively evaluate the collected data, both quantitative and qualitative. It is also important to be aware of the culturally specific nature of much of the literature on well-being and its assumed link to notions of mental health (Baxter and Burnell 2022: 16). One aim of the project is an examination of the potential effects of being in the landscape and any feelings of continuity that may bring to participants. In future work it may be useful to separate the examination of groups by the types of specific activity they undertook during fieldwork. As heritage specialists, we also need to undertake more theoretical work on why participating in an archaeological project, or spending time in a historic place or landscape, may provide an emotional and intellectual basis for notions of well-being.

To further examine the effect of community heritage projects, subsequent work has begun to explore this, using experimental community test pitting excavations. That work examined a control group who were not involved with test pitting. It found increased perceptions of community support, higher self-efficacy, life-satisfaction and positive emotion were associated with the test pitting group, but were not observed in the control group (Brizi *et al.* 2023). In tandem with this blind control group approach, there is also a need for a better conceptualisation of the range of human responses to landscapes, historic places, and the potential benefits of archaeological methodology.

Creating the conditions for both a methodological and creative investigation of the archaeological elements, and the connections with the surrounding landscape is the fundamental basis of a successful project. The relationship between achieving this and making funding and logistical arrangements, can be challenging. It is important that as practitioners we do not gloss over the difficulties and the disconnects. Discovery is a key rewarding aspect of the work; both the exercise of ‘archaeological imagination’, as Michael Shanks terms it, and the appeal of the actual process of doing archaeology recently noted by Paul Everill (2022). It is a communal exercise and one that benefits from the involvement of many different people and perspectives.

Introducing Jomon at Stonehenge

One of the ambitions of the Centre for Archaeology and Heritage at the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures is to introduce Japanese archaeology to audiences outside Japan who are unfamiliar with what Japanese archaeology has to offer. To this end, we use a variety of media to present Japanese archaeology, sometimes using a comparative approach.

Most recently, following several years of preparation working in partnership with English Heritage, the Niigata Prefectural Museum of History and the Jomon Sites of Northern Japan UNESCO World Heritage we held a special exhibition at the Stonehenge Visitor Centre, which opened in 2012. *Circles of Stone: Stonehenge and Prehistoric Japan* opened for a year in September 2022 and closed with a conference on the theme of *Stone Circles Across Eurasia* and performances by Japanese taiko drummers. The exhibition was sponsored by the Ishibashi Foundation.

The exhibition, which included some 70 exhibits borrowed from Japan and the UK, was based around four themes: Japan at the time of Stonehenge, with a focus around 5000 years ago; representations of Stonehenge in the work of woodblock print artists Urushibaru Yoshijiro; Japanese connections in the research history of Stonehenge, in particular, through the work of William Gowland; and Japanese stone circles. Materials associated with William Gowland were borrowed from the British Museum and the Society of Antiquaries of London.

The exhibition provided an unprecedented opportunity for English Heritage to engage with Japanese archaeology. Associated events included Jomon pottery making workshops, a display of obsidian working by Japanese students from Nagano prefecture, bilateral visits by specialists from the UK and Japan, and lectures at the Embassy of Japan in London. The project also resulted in a smaller longer-term display at Avebury, the largest known stone circle, part of the same World Heritage Site as Stonehenge. The final stages of preparation for the exhibition coincided with the first major exhibition about prehistory at the British Museum in many decades, *The World of Stonehenge*, which greatly increased interest in prehistoric archaeology generally.

English Heritage was originally established in 1983 as the UK government agency with responsibility for the historic environment, a role previously fulfilled directly by the Department of the Environment. In a major reorganisation in 2016 English Heritage became an independent charity with responsibility for managing over 400 sites of national importance. The role of advising the government on archaeology and the historic environment, including the scheduling (or designation) of ancient monuments, was given to a new organisation, Historic England. English Heritage was established with a major grant for 8 years from the UK government, following which (i.e. from this year, 2024) it has to sustain itself using entry charges to sites such as Stonehenge and through raising funds from its membership and other sources.

A series of major research projects investigating both Stonehenge and associated sites in the landscape have transformed our understanding of this most famous of archaeological sites in recent years. In particular the Stonehenge Riverside Project directed by Mike Parker Pearson of the University of London and a team of leading British prehistorians included new excavations at Stonehenge itself and a major reassessment of previous investigations, the recognition of the importance of the nearby River Avon in the Stonehenge landscape, the excavation of a large Neolithic settlement at Durrington Walls, and the identification of the remains of a previously unknown stone circle, Bluestonehenge. I have introduced these discoveries in a series of recent publications.

The exhibition provided the opportunity to present research at Jomon stone circles, in particular Oyu and Isedotai in Akita prefecture, and to consider comparisons between stone circles in the British Isles and the Japanese archipelago. These comparisons included the use of such monuments for funerary rituals; the archaeo-astronomical significance of stone circles, in particular in relation to the winter and summer equinoxes; the occupational histories and developmental sequences at these sites, now supported by large numbers of high resolution radiocarbon dates; the relationship between stone circles and their surrounding landscapes; the petrographic analysis of the stones used to build the stone circles, and where they came from; and the material culture associated with stone circles and what this tells us about prehistoric social interactions.

In addition to the purely archaeological interest of these sites, the exhibition project allowed us to consider the significance of stone circles as cultural heritage, and their role in the modern world. Stonehenge attracts over 1.5 million visitors each year from around the world, and access is granted for free at the equinoxes and solstices, occasions which bring many people to the site who still regard it as having sacred importance. The inscription of the Jomon sites of northern Japan as UNESCO World Heritage is encouraging greater tourism to Jomon stone circles, as well as enhanced visitor facilities including interactive digital displays and much more information in languages other than Japanese. As well as bringing economic benefits, increased tourism can impact on the preservation and conservation of fragile archaeological remains, including stone circles. There is currently much public scrutiny of plans to build a road tunnel within the Stonehenge World Heritage Site, and there was great interest in the situation at Washinoki in Hokkaido, where the stone circles were preserved through building a road tunnel directly beneath the site.

As with all good international research projects, Circles of Stone fostered new research networks, and we hope that the exhibition and the associated research has laid the foundations for further collaborations between British and Japanese archaeology.

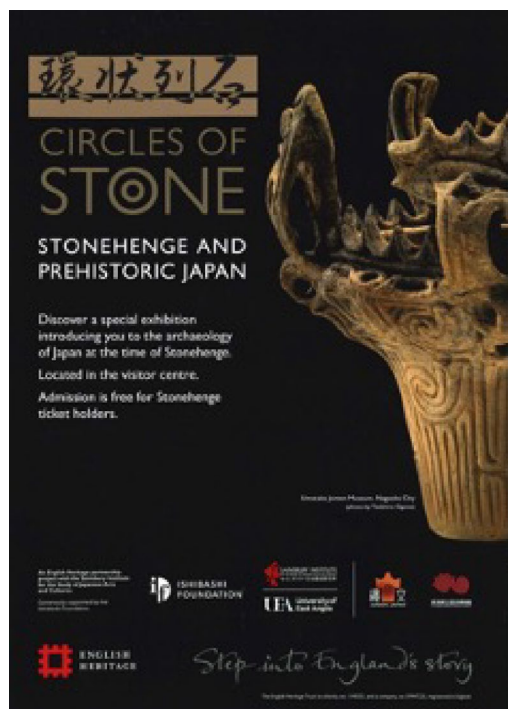


Fig.1 Poster for Circles of Stone Exhibition at Stonehenge

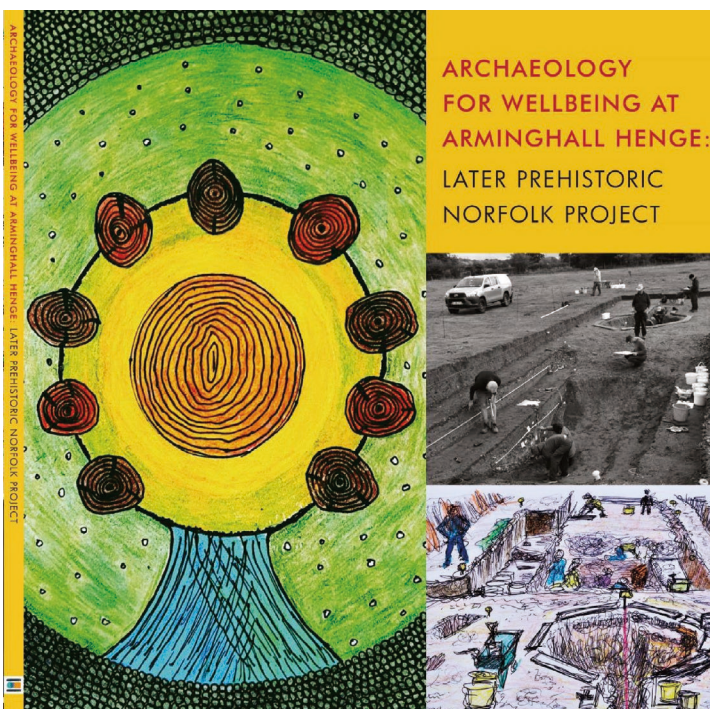


Fig.3 ○○

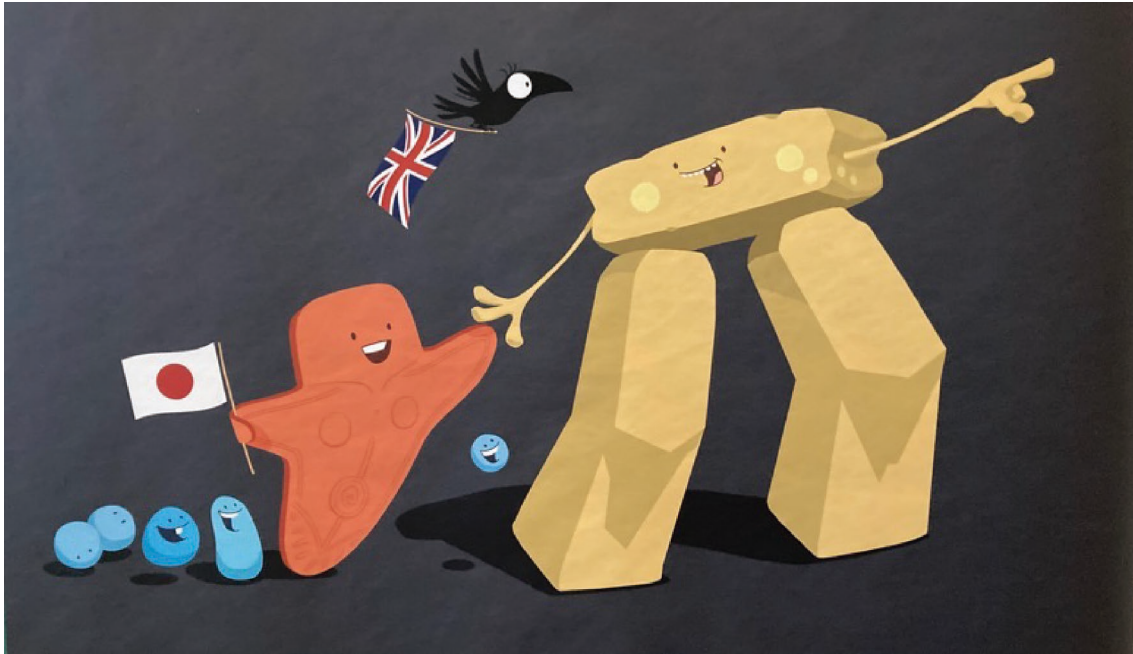


Fig. 2 Big Rock and Little Pot yurukyara developed for Circles of Stone exhibition

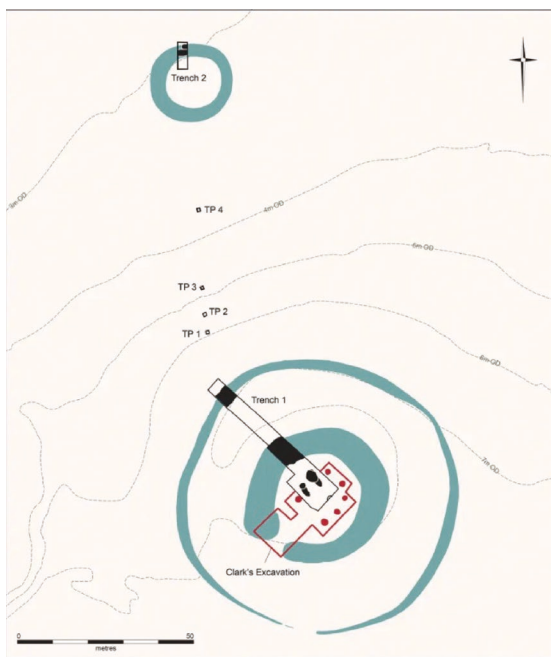


Fig. 4 Plan of Arminghall Henge

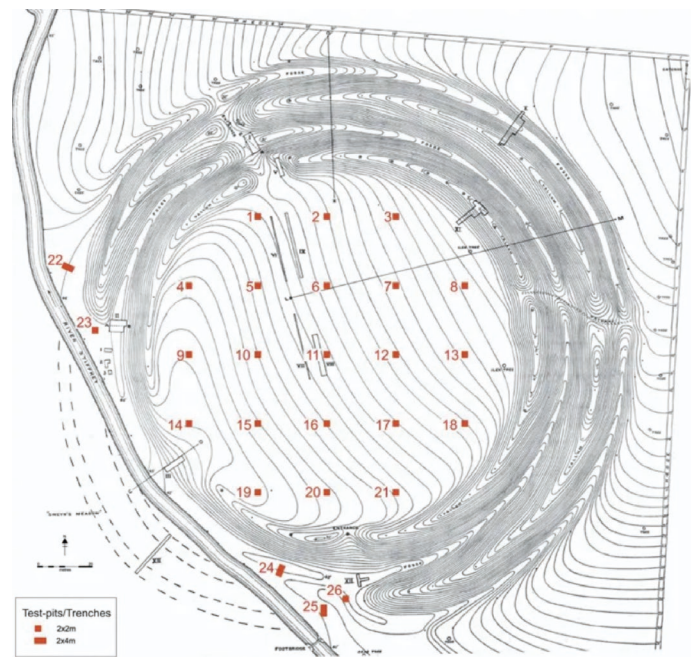


Fig. 5 Plan of Warham Camp

References

- Baxter, L. and K. Burnell 2022. What is wellbeing and how do we measure and evaluate it?, in P. Everill and K. Burnell (eds) *Archaeology, Heritage, and Wellbeing: Authentic, Powerful, and Therapeutic Engagement with the Past*: 7-25. Milton, UK: Taylor & Francis Group.
- Brizi, A., A. Rabinovich and C. Lewis 2023. Psychological outcomes of local heritage engagement: Participation in community archaeological excavations increases well-being, self-efficacy, and perceived community support. *Journal of Applied Social Psychology*: 1-12, viewed 24 July 2023, <<https://doi.org/10.1111/jasp.12972>>.
- Crawford, O. G. S. 1929. Editorial notes. *Antiquity* 3: 257-260.

- Everill, P. 2022. Introduction to archaeology: a personal perspective, in P. Everill and K. Burnell (eds) *Archaeology, Heritage, and Wellbeing: Authentic, Powerful, and Therapeutic Engagement with the Past*. Milton, UK: Taylor & Francis Group.
- Everill, P., R. Bennett and K. Burnell 2020. Dig in: an evaluation of the role of archaeological fieldwork for the improved wellbeing of military veterans. *Antiquity* 94(373): 212-227.
- Everill, P. and K. Burnell 2022. *Archaeology, Heritage, and Wellbeing: Authentic, Powerful, and Therapeutic Engagement with the Past*. Milton: Taylor & Francis Group.
- Fairclough R. and A. Hutcheson 2022. *Archaeology for wellbeing at Arminghall Henge: Later Prehistoric Norfolk Project*. Norwich: The Restoration Trust.
- Faulkner, N. 2009. The Sedgeford Crisis. *Public Archaeology* 8(1): 51-61.
- Fowler, C. 2004. *The Archaeology of Personhood: An Anthropological Approach*. London: Routledge.
- Merleau-Ponty, M. 1945 [2012]. *Phenomenology of Perception*. Abingdon: Taylor & Francis Group.
- Pearson, M. and M. Shanks 2001. *Theatre/archaeology*. London: Psychology Press.
- Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, 2023, Globalising British Archaeology Through a Japanese Lens, viewed 21 July 2023, <<https://www.sainsbury-institute.org/project/globalising-british-archaeology-through-a-japanese-lens/>>.
- Shanks, M. 2012. *The Archaeological Imagination*. Walnut Creek: Left Coast Press.
- Strathern, M. 1999. *Property, Substance, and Effect: Anthropological Essays on Persons and Things*. London: Athlone Press.
- Tilley, C. 1994. *A Phenomenology of Landscape: Places, Paths, and Monuments*. Oxford: Berg.
- Tilley, C. and K. Cameron-Daum 2017. *An Anthropology of Landscape: The Extraordinary in the Ordinary*. London: UCL Press.
- Winterton, S. 2014. From the Army Medical Centre to Operation Nightingale: My entry into archaeology. *Journal of Community Archaeology & Heritage* 1(3): 245-247.